

苛^{いらつ}付^ついている。其^{その}事^{こと}さえ意識^{いしき}していない。先^{さき}程^{ほど}の暴^{ぼう}言^{ごん}が頭^{うか}に浮^うぶ。

家事^{かじ}くらいちゃんとやれば？

家事^{かじ}が自分の仕事^{しごと}だとは考え^{かんが}えない。母親^{ぼてん}は、母親^{ぼてん}なのだから、家事^{かじ}をすべきだ。当然^{たうぜん}の論^{ろん}理^りが臟^{ぞう}腑^ふにおちる。疑^{うた}がったことさえない。だから夫^{それ}を破^{やぶ}る母^{はは}を怠^{おろそ}慢^{まん}と見た。綏^{すい}はドカリと自分の椅子^{いす}に座^まった。玄^{けん}關^{くわん}でゴソゴソと気^き配^{はい}がして、扉^{かど}の開^{ひら}く音^ねがした。

母^{はは}が出て行^いったのを確^{たし}認^{にん}して居^い間に戻^{かえ}る。兄^{あに}は早^{はや}々と弁^{べん}当^{とう}屋^やのチ^ちラシ^{らし}を見ていた。今日^{けふ}の晚^{ゆふ}ご飯^{いひ}。

「おれはカツ井^{かつい}にするけど、お前^{まへ}どうする？」

「おれもカツ井^{かつい}」と答^{こた}えてテレ^てビ^びを付^つける。不^ふ貞^{てい}腐^ふれ^れていた。なぜ、母^{はは}は男^{おとこ}と旨^{うま}い飯^{いひ}をくって、自分^{自分}達は弁^{べん}当^{とう}をたべなければいけ^いないのか。何^{なん}度^ど同^{どう}じ^じこ^こが起^{おこ}っても納^な得^{とく}行^いかない。男^{おとこ}と出^でかけるのが悪^{わる}いと言^いっている訳^{わけ}ではない。母^{はは}は離^り婚^{こん}していて、独^{ひとり}り身^みで、だから倫^{りん}理^り的^{てき}な問^{もん}題^{だい}を云^い々^ん々^んする積^つり^{もり}はない。しかし夫^{それ}なら、家事^{かじ}を最低^{さいてい}限^{げん}こなし^こしてから行^いくべきではないのか。綏^{すい}の最低^{さいてい}限^{げん}とは自分^{自分}が生活^{せいかつ}できる範^{はん}圍^い、つまり家事^{かじ}の略^{りやく}凡^{ぼん}て^てを意^い味^みしていた。

「おい、今日^{けふ}はおれがカツ井^{かつい}の日^ひだろ」声^{こゑ}をあげる兄^{あに}に聞^きえない佯^{ふり}をした。すぐとなり^{となり}にいて聞^きえない訳^{わけ}はないが兄^{あに}は「ったく」とい^いって再^{また}びチ^ちラシ^{らし}に目^めを向^むける。母^{はは}が置^おいてい^いったのは千^{せん}円^{えん}であり、カツ井^{かつい}は五百^{ごひゃく}二十^{にじゅう}円^{えん}するので毎^{まい}回^{かい}交^{こう}代^{だい}で食^くべるとい^いうのが兄^{あに}弟^{てい}のル^ルール^{ール}だった。綏^{すい}は夫^{それ}を破^{やぶ}って置^おきながら罪^{つみ}惡^{あく}感^{かん}を感じ^{かん}じなかつた。

自分^{自分}が抱^{かか}っている感^{かん}情^{じやう}を嫉^{あや}妬^まとよぶ^よぶ^ぶことに、綏^{すい}は気^きづ^づかなかつた。母^{はは}が母^{はは}以前^{いぜん}の女^めに戻^{かえ}ることが、許^{ゆる}せない丈^{だけ}だった。母^{はは}が休^{やす}みなく仕^し事^{ごと}をしてい^いること、毎^{まい}日^{にち}の洗^{せん}濯^{じやく}、隙^{ひま}を見^みつけての掃^{はき}除^ぞをしてい^いる事^{こと}は、勘^{かん}定^{てい}に入^いれなかつた。してい^いることより怠^{おろそ}慢^{まん}が目^めに付^ついた。だ

から其怠慢を挙げれば、母を非難する立場、自分は非難されない立場に、いられた。

綏は母の彼氏、恋人に、会った事があった。若い燕、などというものでなく、年相応の、母に合った、男の人だった。綏は彼に挨拶しなかった。幼なさのせいとも、愚かであるとも、思わなかった。

「ぼくの夢」

綏は心の中で読んだ。ぼくの夢は、お父さんと、お母さんがなかなかなくなって、みんなであわせになることです。この部分に来ると赤面した。自分が書いたものと思えなかった。小学校三年生の時に書いた作文で、此頃には、父と母が不仲になっていたことを思い起させた。

父と母がいつから左右なっていたかは分らない。只父は烟りの様に消えた。何年も後で、兄に其話しをすると、少しずつ荷物を運んでいったよと言われた。綏には其記憶がない。もっと詳しく話しをきこうと思ったが、兄弟の間でも、その話しをするのは憚かられた。

どうして父がいなくなったのかを綏は知らない。どの様にいなくなったのかも、知らない。只もう父がいらないんだという事だけは理解した。其理解の過程も分らない。只綏は其現実に順応した。或は順応しようと力めた。

友達の家から帰ると、偶然母に会った。母は「あら」と言った。綏は気づいたが連れ立って歩くのが恥しく、母が持っていたスーパーの袋を奪うとずんずんと先に歩いた。袋は重かった。働らくこと、其後の疲れ、なに一つ知らない綏は其重さ丈厄介に感じた。

先に家に着くと、適当な所に袋を置いた。テレビを見ようと居間に向うとガチャリと音がした。振り向くと袋から卵が落ちていた。十個入の、一つずつがプラスチックに入った卵は、うち二つが割れていた。母が帰ってくる。「ごめん、卵」お帰りより先に言った。母は夫を見てから「もつたいないから、焼いて喰べちゃおう」と玉子焼を拵

らえた。「ありがとね」とも言った。綏は母が決して自分を責めないこと（仮令自分がどんなに詰つても）にも気付かず玉子焼を旨いと思つて食べた。

母の晩御飯はおいしかった。だから、作つて欲しいんだとは、言えなかつた。

また喧嘩をした。気が腐々する。今日は作る積だつたけど、残業になって仕舞い、ご飯を作れなかつたそうだ。母は仕事が終わつて其儘男に会いに行つた。電話で其事を告げられた綏は、「ああそう」と言い乱暴に受話器を置いた。左右すれば怒りの一端は伝わる筈と思つた。

又弁当を買つて来て、綏は、兄に言つた。

「兄ちゃんは何にも思わないの？ あの人（母）、寿司食つたり、天麩羅食つたりしてんだってよ、この前酔っ払つて帰つてきて言つてた。んでおれ達五百円の弁当かよ。おかしいと思わない」

兄はテレビを見ていた。顔もむけずにいう。

「お母さんがしあわせになんならいいんじゃない」

綏は苛烈いていたのでなんにも思わなかつた。飯を食べ、風呂に入ると、母と自分の不公平を思い怒りが復り返した。タオルで髪を拭いていると洗濯物を取り込んでいないことを思い出した。ベランダに出て室に仕舞つてゆく。天気の良い日で、夜空の星が、目に着いた。家からの景色は、好くはなく、空も満天の星には程遠かつた。兄が言つたしあわせという単語を思い出した。ぼくの夢。綏は気づいた。あの夢は、叶わなかつたけれど、まだ、凡てが叶わない訳じゃないんだ。

綏はくしゃみを一つした。明るい室に戻り、中から、鍵を閉めた。